

教員活動状況報告書

提出日：令和 6 年 3 月 1 日

所 属： 獣医学部 獣医学科

氏 名：岡谷友三アレシヤンドレ 職位：講師

役 職：

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

獣医公衆衛生学（総論・食品衛生学）（獣医学科・3年後期・必須）

食品衛生学は食品の衛生管理や食中毒の予防を行う上で重要な学問であり、一般企業のみならず、特に公衆衛生行政で重要な分野である。

そのため、これらの業務に携わる獣医師は食品衛生学に精通している必要がある。本科目では、学生にその重要性を理解してもらい、内容を学び、理解し、将来的にその分野のエキスパートになれるよう指導を行っている。

獣医公衆衛生学（人獣共通感染症）（獣医学科・4年後期・必須）

人獣共通感染症は獣医領域のみならず、人の医療領域でも大きな問題であり、人獣共通感染症の予防や制御に関しては獣医師が大きな役割を果たしている。そのため、獣医師は関連する疾病に精通し、これらの特徴や予防法に精通している必要がある。

将来、人獣共通感染症の対応に携わる学生にはこれらの疾病について学び、理解し、必要業務を遂行できるよう指導を行っている。

獣医公衆衛生学実習 I（獣医学科・4年前期・必須）

獣医公衆衛生学分野の食中毒原因物質や人獣共通感染症は取り扱いを間違えると、業務を行っている本人のみならず、地域等に大きな損害を与える可能性、また危険な物質を地域にまん延させる可能性がある。したがって、これらを取り扱う獣医師はその取扱い方法や注意点について精通している必要がある。

本実習では、学生に食中毒原因物質や人獣共通感染症原因菌等の取り扱いについて学び、理解し、将来的にこれらの業務を遂行できるように指導を行っている。

獣医学特論 I（獣医学科・5年通年・必須）

研究室において、専門分野（獣医公衆衛生学）に関する知識を深めると同時に関連分野の文献の検索・検討を行う。得た情報等を基に研究内容を精査・実施し、将来的に自立して問題の提起・解決法を提唱・実施できる人材を育成する。

獣医学特論 II（獣医学科・6年通年・必須）

獣医学特論 I で得た知識や成果をさらに発展させ、より高度な内容に対応できる人材を

育成する。

卒業論文（獣医学科・6年通年・必須）

研究室において、獣医学特論Ⅰ・Ⅱで得た知識と結果をまとめ、これらを他に公表できる形に整え社会に貢献できる人材を育成する。

総合獣医学（獣医学科・6年後期・必須）

6年前期までに習得した専門科目（獣医公衆衛生学）の要点について復習をし、獣医師として必要とされる基本的事項を確実に身につける。

科目名	学科・専攻	必，選， 自	配当年次	受講者数
獣医公衆衛生学 （総論・食品衛生学）	獣医学科	必須	3	140
獣医公衆衛生学 （人獣共通感染症）	医学科	必須	4	140
獣医公衆衛生学実習Ⅰ	医学科	必須	4	140
獣医学特論Ⅰ	医学科	必須	5	7
獣医学特論Ⅱ	医学科	必須	6	5
卒業論文	医学科	必須	6	5
総合獣医学	医学科	必須	6	143

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

獣医公衆衛生学（総論・食品衛生、人獣共通感染症）および獣医公衆衛生学実習Ⅰ（食中毒、人獣共通感染症）は獣医師領域の多分野で必要となる知識であり、獣医国家試験の必須科目である。また、これらの分野は人の日常に密接に関連した問題でもあり、日常的に事件・事例が発生している。このことを理解したうえでこれらの問題を対処できる学生を育成することが目標である。また、国家試験についても、問題なく受かる学力を身につけることを理念とする。

私自身は外国（ブラジル）で育ち、獣医学も日本と異なる環境で教授した。したがって、類似した内容であっても、異なる観点でものを見て考えることができる。このように、物の考え方を一辺倒ではなく、多角的に見て考え、物事を広い視野でとらえることができる人間を育成する。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

獣医公衆衛生学も獣医公衆衛生学実習Ⅰも獣医国家試験の必須科目であり、非常に分

量が多い。そのため、多くの部分はいわゆる「詰め込み」方式で内容を記憶する必要がある。その「記憶する作業」を援助するため、なるべく内容をコンパクトにしたスライド等を作成し、多くの情報をまとめて教授できるように工夫をしている。また、これらの科目で学ぶ問題は社会で日常的に起こっている。これらを学生に提示し、より身近であると感じ取ってもらい、興味を持ってもらうようにしている。さらに、出来る限り関連した話題を学生に提供し、どのように考えるかなどの議論を試みている。

アクティブラーニングについての取組

授業・実習の内容にリンクした実際に起こった問題を提示し、学生自身で考えるよう促している。また、実習については、行う作業を前もって説明し、予習を促し、さらには実施した作業について学生に説明させるなどをして復習をさせている。

ICTの教育への活用

學理を利用して学生にパワーポイントで作成したファイルや動画を提供。また、課題などを課した。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

①教育（授業，実習）の創意工夫（A）

教科書以外に過去や現在に起こっている関連事象を組み込んだ授業用スライドやまとめを作成して授業・実習を実施している。

②学生の理解度の把握（B）

授業毎、実習毎に学んだことについて学生に問いかけ、一方方向の授業にならないように心掛けることによりその理解度の把握を試みている。

③学生の自学自習を促すための工夫（B）

授業・実習のたびにすでに学んだことについて問いかけをすることを心掛けている。また、課題やレポート等を課して自学実習を促している。

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A）

学生が質問をしやすい環境を作ることを心掛けており、質問があれば即座に対応している。

⑤双方向授業への工夫（A）

授業では学生に質問を投げかけることで学生とのやり取りを試みている。また、実習では実施した作業や得られた結果について学生に問いかけして双方向授業を心掛けてい

る。

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。(V 学科, M 学科の教員の方のみ記載してください。)

授業・実習中に特に過去の国家試験で頻繁に出題された内容に関してはそのことを伝えて注意を促している。また、近年の出題傾向から重要と思われる項目は強調して授業・実習を行っている。

5. 学生授業評価

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

学生にわかりづらいと指摘されたスライドや見づらいと指摘があったものの改善を行い、説明の仕方や表示方法を工夫した。

②①の結果はどうでしたか。

同じような指摘はなくなった。

③②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

学生の授業評価は常に確認し、必要があれば対応する。

6. 学生の学修成果

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

授業・実習内容がとにかく「記憶する」ことが多いので学生が興味を持ちづらい。

これらの内容が日常にリンクした内容でありことをなるべく強調し、それらの重要性を認識させ、記憶に残るよう努力をしている。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

学生からの評価は賛否両論あり、基本的にはバランスの取れた内容となっていると思われる。

7. 指導力向上のための取組 (FD 研究会参加状況)

FD 研究会にはできる限り参加し、自身の授業や実習に取り入れることができるものは活用している。また、他の教員の授業を拝聴できる場合にはそれら授業でよいと思ったことを取り入れるようにしている。

8. 今後の目標 (理念の実現に向かう今後のマイルストーン)

授業・実習内容はコアカリに準じたものでなくてはならないが、関連した時事ネタ

などを込みこんだ資料等の準備を行い、学生がより積極的に勉強するようにしたい。また、より多くの内容を提示し、広い観点でものを見られる学生を育成したい。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

シラバス、レポート課題、PPT教材、配布資料。